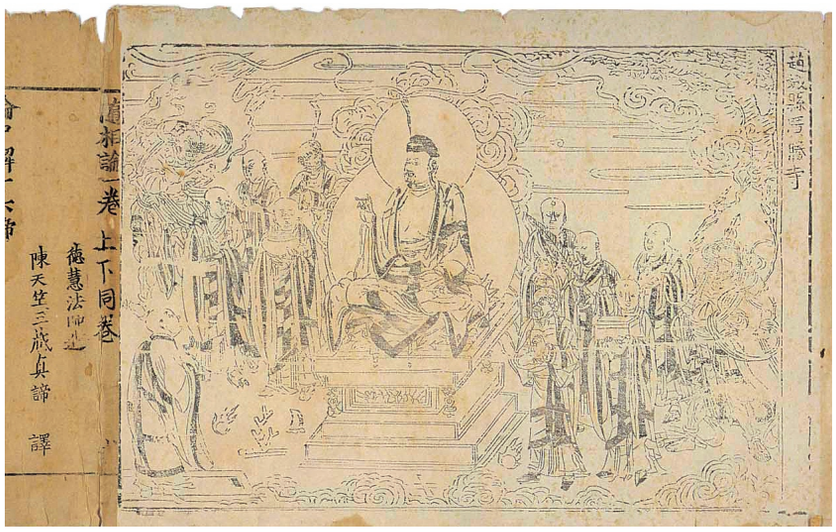
Chinese Characters and Culture
漢字文化

漢字と文化

漢字文化の全き繼承と發展のために

京都大學 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報學研究教育據點

第 5 号



目 次

人名用漢字あれこれ …… 2
東南アジア華僑・華人研究をめぐる近年の状況について …… 4
日中共同シンポジウム「漢字文献資料庫的新技術」参加報告 …… 6
臺灣中央研究院歴史語言研究所見聞錄 …… 8
天文から人文へ …… 10

人名用漢字あれこれ

阿辻哲次

昨年の九月に人名用漢字が大幅に追加されたきっかけの一つに，とあるテレビ番組があった。それはテレビ東京系で放送されていた『ジカダンパン　責任者出てこい！』という番組で，今もなお絶大な人気をほこるみのもんた氏が司会し，世の中のさまざまな問題について，レギュラー陣とスタジオ参加の視聴者が討論し，さらにその問題に関してなんらかの業務に従事している人物をスタジオに招いて，直接対決＝「ジカダンパン」させる番組であった（なおこの番組はすでに終了している）。

日常生活で直面する問題の中には自分たちの努力だけではなかなか解決できないものも多くあり，この番組はそんなやっかいな問題を公開の場で討論して解決する，あるいは解決のための方法を模索するというコンセプトで作られていたようだ。しかし問題を提起する側は，議論が白熱していくうちにともすれば感情的になりがちで，一方的に憤懣をぶつけられる側から見れば，それはテレビという強大な権力による「公開吊るし上げ」としか思えない，という辛辣な批判もある番組だった。

二〇〇二年十二月九日に放送されたその番組で，人名用漢字の問題が取りあげられた。私自身はその番組を見ていないのだが，のちに人から聞いたところでは，子供に「舵」という名前をつけようとして受け付けられなかったことに納得できない夫婦が登場し，また番組から相談を受けた渡辺喜美衆議院議員（かのミッチーのご子息である）が，「梨」は使えるのに，同じフルーツで自分の選挙区（栃木県）の名産である「苺」が名前に使えないのは理不尽であると法務省に問いただし，最終的には渡辺議員が森山真弓法務大臣（当時）に掛けあって善処を依頼する，という展開だったそうだ。実際に森山大臣はその夫婦に面会し，その時にうけた請願が人名用漢字追加の決断につながったという（産経新聞二〇〇三年一月二十三日夕刊）。

ジカダンパン！責任者出てこい！

バラエティー

テレビ東京　後9・00〜9・54（54分）

東京都練馬区光が丘駅前に増え続ける迷惑駐輪を直談判。この場所の放置自転車の数は、平成12年の都営大江戸線開通により激増。今では1日1000台以上が所狭しと駐輪される始末。練馬区役所に話を聞くと、駐輪地は隣接する光が丘公園の通路で、都の管轄となるというのだが…。スタジオには連日、放置自転車に駐輪場案内のステッカーをはっているボランティアが登場。

ほか、人名漢字の基準自由化を訴える

（出典：『TV ガイド（関東版）』2121号（2002年12月7-13日号，p. 65））

この時の番組では「舵」や「苺」のほかに，人名に使いたい漢字として

牙・凛・遙・漣・鷲・雫・仍・煜

などがあげられたらしい。

「漣」や「鷲」を子供の名前に使いたいという希望にはうなづけるが，しかし「牙」を名前に使いたいという希望は，私にはちょっと理解できない。聞けばそのころ人気があった劇画の主人公がこの字を名前に使っていたそうだ。漫画の登場人物やタレントの名前が子供の命名に影響を与えることは珍しくないようで，これもその例のひとつだった。また「凛」と「遙」はすでに「凜」と「遥」という字形がすでに人名用漢字に入っていたが，こちらの方の形を使いたいとのことであった。これまで人名用漢字には「一字種一字体」という原則があったが，この要望はその原則を破ることを要求するものであった。

番組で要望として出された中に「煜」がある。

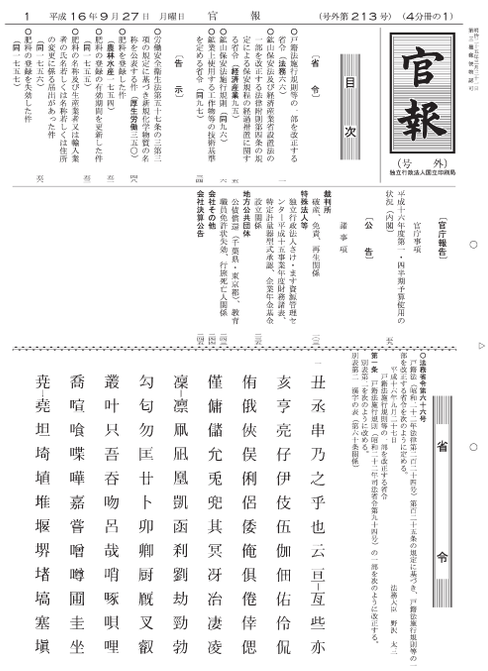
これは通常の日本語表記においてはまず使われない漢字である。南唐時代（九三七〜九七八）に李煜という文学者がいた。広い意味での漢詩の一種で，口語で書かれる「詞」という韻文の名手で，深い哀愁と憂いにみちた作風で知られるが，そんな文人を知っているのは中国文学に相当くわしい人以外にはまずいない。「煜」という漢字を使った熟語はほかにちょっと思いつかず，そんな珍しい漢字がいったいなぜ命名に関する要望として出されたのか，さらには「煜」でなんと読ませようとするのか，番組の中では言及があったのだろうが，それを見ていない私にはまったくわからない。いずれにせよ，「煜」 が人名に使える「常用平易」な漢字であると考える人は，世間には決して多くないことだろう。

私にも経験があるが，生まれた子供の名前を考えるのは幸福な作業である。そうして一生懸命考えた名前を記載した出生届を役所にもっていった時に，この漢字は使えませんといわれたら，そう簡単に「おや，そうなのですか」と引き下がれるものではないだろう。がっかりする人もいるだろうし，せっかく選んだ漢字が使えない理由を窓口で係官に強硬に問いただす人だっているにちがいない。さらには裁判という手段に訴える人だっている。そして裁判まではしなくても，次の子供にはぜひともこの字を使いたいとの考えから，その漢字を人名用漢字に追加してほしいと法務局に要望を出す人はかなりたくさんいるようだ。

人名用漢字見直しの審議会では，その段階までに集まっていたそんな要望がすべて検討され，その結果として「苺」や「煌」などおくつかの漢字が追加された。しかしこの要望というのも千差万別で，中には首をひねりたくなる奇妙なものがいくつかあった。

私が驚いたのは，「腥」という漢字を名前に使いたいという要望だった。「腥」を音読みのセイではなく，「あきら」と読ませたいというのである。

名前に使う漢字は字種の制限があるだけである。もともと現行の戸籍では名前の読み方を記載する


1　平成16年9月27日　月曜日　官　報　（号外第213号）（4分冊の1）

官報
（号外）
独立行政法人国立印刷局

目次

（省令）
○戸籍法施行規則等の一部を改正する省令（法務六八）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律の一部を改正する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）
○私立学校法及び特殊法人等の会計に関する法律第四条の規定による経過措置に関する件（厚生労働・文部科学・経済産業・国土交通・財務・総務・内閣府令第一号）

（官庁報告）
○宮内庁報告
平成十八年度第一・四半期予算執行の状況（内閣）

（公告）
○裁判所
破産（免責、再生関係）
特殊法人等
地方公共団体
会社その他
会社決算公告

○法務省令第六十六号
戸籍法施行規則等の一部を改正する省令
第一条　戸籍法施行規則等の一部を改正する省令（平成十八年法務省令第十四号）の一部を次のように改正する。
第二条　戸籍法施行規則等の一部を改正する省令（平成十八年法務省令第十四号）の一部を次のように改正する。
別表第二　「腥」の項（第八十条関係）

法務大臣　野沢　太三

丑 承 串 乃 之 乎 也 云 亘 亙 些 亦
亥 亨 亮 仔 伊 伎 伍 伽 佃 佑 伶 侃
侑 俄 俠 俣 俐 倡 倭 俺 倶 倦 倖 偲
僅 傭 儲 允 兎 兜 其 冥 冴 治 凌 凌
凜 凛 凧 凪 凰 凱 函 利 劉 劫 勁 勃
勾 匂 匁 匡 廿 卜 卯 卿 厨 厩 叉 叡
叢 叶 只 吾 呑 吻 呂 哉 哨 啄 唄 哩
喬 喧 喰 喋 嘩 嘉 嘗 噌 噂 圃 圭 坐
尭 堯 坦 埼 埴 堆 堰 堺 堵 塙 塞 塡

（出典：官報（平成16年号外第213号））

欄がない。だから使える漢字であれば，それをどのように読もうと，まったく個人の自由なのである。私の知人に「東」と書いて「はじめ」と読む人がいる。「東西南北」の最初だからそう読むのだそうだが，そうなるともう判じ物の世界である。

だがそれにしても，「腥」を「あきら」と読ませたいという希望は，奇矯というほかない。詳しく聞けば，《日》と《月》を組みあわせた「明」が「あかるい」という意味なのだから，《月》と《星》を組みあわせた「腥」だって，同じ意味になるはずだ，というのである。

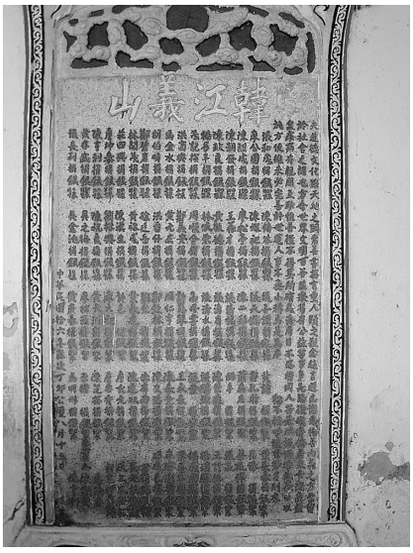
「腥」は周知のごとく「なまぐさい」という意味を表す漢字であって，そんな漢字を名前につけられた子供が，やがて成長して自分の名前の漢字を辞典で引いた時にはきっとびっくりするにちがいない。「腥」という漢字をめぐって，いじめや嘲笑が発生する可能性だって十分に考えられる。もちろんこの漢字は人名用漢字には認められなかったのだが，この議論を通じて世間における漢字に対する捉え方の一斑をかいま見ることができた私は，非常に勉強になったと喜んだことであった。

東南アジア華僑・華人研究をめぐる近年の状況について

東南アジア研究所　濱下武志

1．複合化と個別化を求めて

ここ数年来，華僑・華人研究は，これまでの歴史研究という研究の流れの中のみではなく，現在進行しつつある中国をはじめとするアジアの政治経済や社会文化の大きな変化の中で，改めて現在の華僑・華人の動きに関する研究が大変活発になっているとみることができる。その動きを見ると，例えば，李元瑾主編『新馬華人：伝統与現代的対話』（南洋理工大学　2002年），陳嘉榮，張英杰，施宝美，曽雄威，陳春燕『新新関係―看新山人如何新加坡』（土司工作室　2001年），察佩蓉『清季駐新加坡領事之探討（1877–1911）』（新加坡国立大学中文系・八方文化企業公司　2002年），呉華編著『馬新海南族群史料匯編』（馬来西亜海南会館聯合会出版　1999年），Johannes Pflegerl, Siew-Ean Khoo, Brenda S. A. Yeoh, Verene Koh eds., *Researching Migration and the Family, Asian Metacentre for Population and Sustainable Development Analysis*, SUP, 2003），韓方明『華人与馬来西亜現代化進程』（商務印書館，2002），など，シンガポールならびにマレーシアの華僑・華人についてだけ取り上げてみても，研究の射程はとても広く文学・語学さらには地域間関係にも及んでいる。私自身は文学・語学について触れる力は無いが，これらの論考の中に含まれた文学研究，特に「新馬華人」文学を通して，当該地域における華僑華人研究の深さをうかがい知ることができる。また，シンガポール大学においてなされた華僑華人研究を見ると，80年代後半は，大体一年一本程度であったが，90年代後半になると，一年間に10本を超える専論が刊行されており，その研究範囲は，シンガポールのみならず，より広く東南アジアをめぐっての華僑華人研究というかたちで展開されている。



タイ南部ソンクラーの潮州人墓地石碑（1927年建立）

例えば，先に掲げたように，シンガポールと福建の関係だけではなく，新新関係（シンガポールとジョホールバル関係）のような，非常にローカルな視点での研究も出されることが特徴的である。

また，マレーシアにおいては，2002年の10月，Chinese Scholarship in Malay World というテーマの国際会議が開かれ，マラヤ世界における中国学術研究というテーマで，華僑華人だけではなく，マラヤ世界という歴史の長さのなかでの華僑華人の役割と同時に，中国それ自身に関する研究も含めた，広い意味での中国研究が議論された。その中に，「華人ムスリム」に関する研究があり，福建，広東からムスリムの華人商人がマレー半島にやってきたときに，マラヤに以前から住んでいるムスリム華人は，新たな“商業的ムスリム華人”と区別するために自分たちをユンナンニーズ，つまり雲南人という表現で自称したという。このように，一方では，より広い枠組みでの複合的な

共存が追求されながらも，絶えず新しいアイデンティティの核心が求められているといえる。

2．最近の漢語教育と華人文学との関係ないしは矛盾

この動きのなかでも，漢語教育と華人文学との関係は，最近最も大きな変化を見せている領域であるといえる。海外における漢語教育は，歴史的には華僑の国語教育，モラル教育としての国語，国民意識の涵養手段としての国語という明確な目的をこれまで持ってきた。たとえば，林珠光「南洋華僑小学課程之研究」（『僑務月報特刊：本会（僑務委員会）４周年紀念専号』民国25年４月発行，５頁）において，漢語は，善悪・徳性と結び付けられて用いられている。すなわち，心性において善は「同情」「従順」などであり，悪は「虚栄」「阿諛」などと表現されている。しかし，最近では語学教育としての漢語，音韻学としての漢語として用いられる傾向が強く（周小兵・宋永波『対外漢語閲読研究』北京大学出版社，2005年），上海の華東師範大学には，「海外漢語系」という学科が新設され，海外で漢語（中国語）を教える教員を専門に養成している。このような形で，より一般化された形での漢語教育が進められていると見ることができる。

他方，華人文学においては，銭芃子『世界華人文学的新視野』（中国社会科学出版社，2005年）にみるように，華人文学という１つのカテゴリーを追求し，それを世界化の動きと重ね合わせて描きながらも，同時に，個別地域性の特徴を議論しようとしている。なかでも，馬華文学とよばれるマレーシア，シンガポール華人の文学は，その地域的な独自性が強調されてきた。この世界性と地域性をめぐる議論には，現在では少なからず，簡体字と繁体字の関係も関わっていると思われる。

2005年６月３日の『参攷消息』報（本社北京，www.xinhuanet.com）は，「中国大地」欄に「簡体漢字在国際社会漸漸看俏」という見出し記事をのせ，『連合報』（台湾）の５月30日付「繁体一夕

林姑娘大祭を知らせるポスター（タイ南部パタニ，2003年）

変簡体」という記事を紹介した。それは，中国で学習や研究をしようとする場合，簡体字を知らねば落伍者になってしまう，という内容であり，同時に，日本，韓国の漢字教育の独自の特徴も指摘されている。このような議論の背景には，文化的ヘゲモニーともいうべき，伝統文化をめぐる角逐も存在しているように思われる（傅国涌『1949年：中国知識分子的私人記録』長江文芸出版社，2005年）。

このように，漢語世界それ自身が，複合文化（ハイブリッド）（Dean Chan, “The Dim Sum vs the Meat Pie: On the Rhetoric of Becoming an Inbetween Asian-Australian Artist,” *Alter/Asians : Asian-Australian Identities in Art, Media and Popular Culture*, Ien Ang, Sharon Chalmers, Lisa Law and Mandy Thomas eds, Sydney: Pluto Press, 2001）的な様相を示しつつある中で，一方では包括的な議論の枠組みが追及されながらも（.庄国土『華僑華人与中国的関係』広東高等教育出版社，2001，曽少聰『漂泊与根植：当代東南亜華人族群関係研究』中国社会科学出版社，2004年），その動きと強い緊張関係を保ちながら，個別領域からのより強い求心力を主張する働きかけがおこなわれると看做すことができる。 しばらく目が離せないところではある。

日中共同シンポジウム「漢字文献資料庫的新技術」参加報告

山﨑　岳

2005年１月22日，大寒さなかの北京において，本COEプログラムと中国国家図書館の共催による日中共同シンポジウム「漢字文獻資料庫的新技術」が開催された。本プログラムの拠点リーダー高田時雄教授率いる日本側の出席者として，事業推進担当者である漢字情報研究センターの安岡孝一，クリスティアン・ウィッテルン，守岡知彦の各氏が報告を行ったのに加え，東洋学院大学人文学部教授チャールズ・ミューラー氏のご参加を賜った。中国側からは，中国国家図書館の副館長である陳力氏に会頭のご挨拶をいただき，同国際交流処処長厳向東氏の司会によって，同科研処処長孫一鋼氏，同数字図書館管理処総工程師孫衛氏，同じく翟喜奎氏，そして中国数字図書館有限責任公司の技術総監である牛振東氏の四氏にご報告をいただいた。

次期オリンピックをひかえて空前の好況に湧く北京は，シベリアから吹き付ける北風の身を切るような冷たさにもかかわらず，一昨年のSARS騒ぎも夢であったかのような活気に満ちていた。会場は，北京市街のやや西北より，北京大学，清華大学等が軒を連ねる文教地区にほど近い西直門外，国家図書館に対面して建つ湖北大厦というビルの一室を借りきった。さほど大規模ではないものの熱気のこもった雰囲気の中で，率直な意見交換を行うことができたと信じている。発表は，中国側に英語の通訳が付き，日本側の報告は一切が英語で行われた。演題を発表順に紹介すると，まず午前は孫一鋼「数字资源加工的标准规范研究」，次いで安岡「Text-Searchable Image and Its Applications」，さらに孫衛「古籍数字图书馆的中文信息处理技术综述」，ウィッテルン「From Text to Information—Small Steps towards a Knowledgebase of Tang Civilization」が続いた。中国式に二時間の昼休みをとった後，午後の部は牛振東「多语言处理系统研究」に始まって，守岡「Character Processing Based on Character Ontology」，翟喜奎「基于字符集的中文信息处理」と続き，ミューラー「A Model for Scholarly Collaboration in the Development of On-line Reference Works: The Digital Dictionary of Buddhism」をもって締め括った。

個々の報告の具体的な内容については，別途論文集を出版する予定なのでそちらに譲るとして，ここでは国際会議という今回の学術交流の場が，漢字情報学にとっていかに位置づけられうるのかについて，私なりに考えたことをのべておきたい。

岡目八目ながら，まる一日にわたる会議を親しく傍聴する機会を得た私の印象では，概して中国側の報告は，新たな知見の発表というよりは，日中双方の現状に関して相互理解を深めるうえでの基本的事項の確認といった性質が前面に打ち出されていたようである。一方，日本側の参加者は，より技術的に突っこんだ議論を期待していた向きもあったようで，会議の終了後も，日本側の出席者の間では，こうした国際会議への意味づけと今

後の指針をめぐって率直な意見のやりとりがなされた。その顛末を仔細に渡ってここに紹介することは紙幅の都合上諦めねばならないが，今回の会議に対する日中双方の認識の食い違いは，私見によれば，双方の置かれた社会的文脈の相違を抜きにして語ることはできない。

要因の一端は，中国側の報告者に，いわゆる学界人のみならず企業人も含まれていたという事実からも見てとれる。先方にしてみれば，我々の所謂「漢字」情報処理とはすなわち自国語の電算処理そのものであり，IT 産業春たけなわの感ある中国では，大きなビジネス・チャンスとなりうる分野であろう。差し迫った利害関係にあるわけでもない研究者と技術的な議論にまで踏み込むことは，自らの手の内を見せることにもなりかねないし，ましてや特許や著作権等の観念が，事実上，広く社会的な承認を得ているとは言いがたい中国の産業界では，こうした学術交流の場においても，まずは自己の技術的独創性を表に出すことを差し控えるというのが，技術者としてのマナーとなっていることが想像される。

もう一つ考えられる要因として，共催者が中国国家図書館という，いわば国家の権威を背負って立つ機関だったことがあげられるだろう。周知のように，中国では歴史上古くから大規模な官僚制度の体系が成立しており，日本とは比較にならない広大な地域に統一的な政治体制が敷かれてきた。気候風土から身体的特徴や文化的習慣までさまざまに異なる人々を「一つの中国」のもとに統合してゆかねばならない必要から，史書や法典や度量衡などといった各分野にわたる国家的標準が，歴代王朝によってたゆみ無く制定され続けてきた。「統一」に費やされる国家的エネルギーは，今日の共産党政権においても同様に莫大なものであり，近々，かの二十四史を襲うかたちで，欽定ならぬ国定の『清史』が編纂されるという話題は，歴史学に携わる人でなくとも耳にしたことがあるかも知れない。現在，中国大陸において通用する GB コードの名は「国家标准」（Guójiā Biāozhǔn）の頭文字をとったものだが，統一規格の設定が文字コード等の運用に対してもつ決定的な重要性はここで改めて喋々するまでもないだろう。席上，中国側の報告者諸氏が一貫して強調していたのも，中国において現在通用している規格の尊重であり，今回の会議自体も，今後仮に当センターと中国国家図書館との間で漢字情報処理に関する何らかの技術的提携がなされることがあったとしても，それは北京政府の公認する中国大陸の既成の規格を逸脱するものではありえないということを再確認する場であった。日本側の研究者が期待していた「目新しいこと」は，中国側の報告者にとって「前提となる確認事項」を上回る重要性をもつものではなかったのだろう。

もちろんこの程度の食い違いは，同一のテーマに対する日中相互のスタンスの相違を再度確認するという意味で，むしろ有益な収穫と見なすべきものだ。今後，こうした国際的学術交流の重要性がますます高まりゆく中で，まずは現時点で何がどの程度共有されうるのかを見極めることが，質の高い，実り多い交流を深めるうえで，忘れられてはならない点だろう。共同で扱うべきテーマの絞り込みや研究者間のよりこみ入った意思疎通などに関して今回新たに浮かび上がった具体的な課題は，どれも当事者たちが顔をつきあわせて率直な意見交換を試みることなしには，なかなか意識上にのぼりにくい問題であり，実際，当日会議の席上討論を交わしてみて得た経験と教訓は，今後諸外国との学術交流を深めてゆくうえで，貴重な財産となることであろう。

学術の国際交流は時代の趨勢であり，漢字情報学は漢字文化圏である東アジア諸国間においては，最も先鋭に国際的対話が求められる分野の一つである。ただし，対話にしろ競争にしろ，彼を知り己を知ることから出発しなければならないのは，いかなる分野についても同様に言えることだ。漢字情報学という古くて新しい学問が，国際社会との協調をはかりつつ発展してゆくためには，このような「カルチャーショック」を今後どれだけ乗り越えてゆけるかにかかっている。

臺灣中央研究院歷史語言研究所見聞錄

鍾翀

2004年1月17日到24日，由高田時雄先生率領，筆者與陳捷三人一同訪問了位於台北南港的中央研究院歷史語言研究所（以下簡稱「史語所」）。此次行程包括參觀甲骨文工作室、地理資訊系統工作室、傅斯年圖書館、歷史文物陳列館等，拜會史語所以及在臺灣研究敦煌學、文字學、地理學等相關專業的多位先生。此次在臺的學術交流，收獲甚多，但由於來去匆忙，對史語所的許多專題研究和豐富的文獻收藏，尚無暇細細品味，因此本文先就筆者在該所地理資訊系統工作室所見所聞作一簡單報告。

「地理資訊系統」，即GIS（Geographical Information System），在中國大陸稱作「地理信息系統」，原先是應用於國土資源調查分析及地籍測量等國土管理的電算化系統。GIS在1970年代興起，此後隨著科技的進步及實用需求的擴大，進一步與遙感（Remote Sensing）、衛星定位系統（Global Positioning System）等技術相結合，從而在很大程度上改變了人們對地圖的傳統認識和應用方式，因此得以迅速發展。自1990年代以來，GIS作為一種新的研究手段，開始進入人文社會科學領域，並逐漸得到人文社會科學界的瞭解與重視。以筆者所知，現在東亞地區人文社會科學領域，已有臺灣中研院史語所地理資訊系統工作室、中國大陸復旦大學歷史地理研究中心先後於1996、2001年獨立（或與其它機構合作）進行了GIS應用於人文科學的開發。

據史語所該項目的執行秘書范毅軍先生介紹，現在他們的地理資訊系統工作室已經具有ARCVIEW、WINGIS、電子數位板及個人電腦等基本軟硬件設備。目前開發的系統，其主要功能為以下方面：首先是利用現有紙面地圖、人造衛星圖像和實地測量等，製作各種電子地圖。其次以電子地圖為底圖（Base Map），進行各種資料庫的整合，包括各種影像地圖（如總數約1百萬幅的近代中國各類地圖與航攝圖像、1982年中國陸地衛星假彩色影像圖、日製地圖和美軍地圖等歷史地圖資料）的整合，以及中研院內其它各種現有資料庫（如古籍文獻、碑刻、出土文物等）的整合，從而構成一個多維度、多平台互聯的大型電子資料庫。

在該工作室各項目之中，其中最重要的就是開發了數位化的「中國歷史時空基礎架構」。具體來說，就是運用GIS技術，把譚其驤主編『中國歷史地圖集』與當代「中國數字地圖」（1:1,000,000）相結合，處理成在GIS中可操作的基礎數據平臺。這項工作已於2002年完成第一版，其部分內容也已公開見於網絡，即『中國歷史文化地圖（CCTS）』，網站地址為 http://ccts.ascc.net/。不過，現在開放的內容只是其中的一小部分。如要利用所有內容，則需通過以下三種方式：

一. 主機共置（server collocation）方式：即將本系統安裝於簽約使用單位。簽約使用單位將由中研院負責安裝與教育培訓，並擁有本系統維護之權利，以不定期更新程式與資料內容，確保與本院開放系統之一致性。如果簽約使用單位為史語所的學術交流單位，在費用上只要提供自己所需的電腦，以及安裝與教育培訓的費用即可。據說日本慶應義塾大学現正與該工作室洽談採用此方式利用CCTS。

二. 連線使用方式：即以授權機構電腦之IP範圍限定為主，個別使用者帳號為輔的使用方式。

三. 合作與交換方式：CCTS係以Web-based整合與應用環境為主，具備高度之擴充彈性，因此歡迎與本系統時空範疇相容，具備空間參照特性資訊系統與資料之單位合作與交換。

就目前該工作室CCTS的開發進度來看，譚其驤主編『中國歷史地圖集』（實際上主要是近兩千

年以來中國之行政疆域沿革地圖）的資料庫的構建，已經全部完成。並且在此基礎上增加了部分縣級行政界線的劃分。此外，目前該 CCTS 系統已經整合了中研院內的「漢籍電子文獻系統」，「清代糧價資料庫」，「明清地方志聯合目錄資料庫」等已建資料庫。只要登錄在電子地圖上的地名，均可連接到以上資料庫，提供這些資料庫所收古籍文獻中包含該地名的文章內容或書目索引。如在 CCTS 電子地圖上點擊選擇青浦縣，並同時選擇「明清地方志聯合目錄資料庫」的連接，便可即時查詢該縣的所有地方志文獻目錄及所藏信息等，減少研究者典籍檢索的時間和精力。再者，CCTS 是一個分散式的統合架構，整體系統設計兼具可擴充性（scalability）、整合性（Integration）等方面的考慮。也就是說，利用這一平臺，各領域專家可將自己研究的與時空有關的檔案文獻或圖像資料，不斷投入與其整合。而凡是投入的訊息，經過處理之後，便可在 CCTS 的電子地圖上進行相關地名的檢索，從而使 CCTS 系統的資料庫和實用功能不斷擴大。據瞭解，該工作室將繼續擴充已經建立的資料庫，並計劃在五年內，建立全球單一機構收藏有關中國大陸與臺灣地區地圖及遙測影像的數量最大的資料庫。

CCTS 系統對於我所展開的「唐代ナリッジベース」來說也很有啟發和幫助。因為，文獻記錄中凡與時空有關的人、事、物，都可以在地圖上顯示其時間和空間的位置關係。譬如通過詩作解析，繪製杜甫一生的遊歷路線，並與相關詩作相連結，將有助於研究者瞭解杜甫文學創作的時空背景。

不過，從筆者在該工作室的試用，並與有關人士的交流之後，發現該系統和該工作室的開發組織，尚在如下方面仍需進一步提高。歸納起來有三點：

首先，目前該工作室的 CCTS 系統，空間資料的精確性尚未達到多數研究者的要求。譬如，雖然在 CCTS 的近現代中國電子地圖資料庫中，已經有了各縣劃分的內容，但對於研究者來說，如果一個人口50萬，面積數千平方公里的縣，只提供標有一個縣城地名和反映大致輪廓的小比例尺的縣界，是遠遠不能滿足研究需要的。

其次，以人員組織而言，還缺少專業人員的技術支援。從該工作室網頁和這次的訪問中瞭解到，該工作室在總召集人劉翠溶研究員和執行秘書范毅軍副研究員領導之下，已經形成包括計劃工作、內容研究工作和支援工作三個部門23人在內的較為龐大的組織隊伍。但是，該工作室的研究人員主要以資訊開發人員為主，而真正是地理專業出身，熟悉中國歷史和地理的人員仍顯不足。以筆者本次所見，大約只有 2 名而已。而且由於歷史和現實的原因，他們要到中國大陸開展研究，也有不少困難和限制，這對該系統開發的進度、深度來說，都造成了相當的制約。如對於大多數中國大陸的紙面地圖資料而言，只能機械地將其轉化為電子資料庫，而缺乏像復旦大學歷史地理研究所那樣，有一批擅長尋找歷史地名變遷、歷史地名的隸屬關係、歷史地名比定等的文獻依據，精通歷史地理考證的研究人員。

最後，通過這次的交流瞭解到，由於對於譚其驤主編『中國歷史地圖集』的版權問題，現在該工作室與復旦大學歷史地理研究所與美國哈佛大學合作的「中國歷史地理信息系統（CHGIS）」開發小組之間互相沒有交流，雙方各自獨立開發，從宏觀角度來看，造成學術資源整合的困難，也不利於整個學科的發展。

順便提到，除 CCTS 之外，該工作室於2003年完成「臺灣歷史時空基礎架構平臺」，並對外開放使用（見「臺灣歷史文化地圖」：http://thcts.ascc.net/）。該系統廣泛蒐集了自荷蘭據臺以來之古地圖、以及實測「臺灣堡圖」（1:20000，1904）與「臺灣地形圖」（1:25000，1920）等，並與當代臺灣地形圖及相片套疊，建立了臺灣地區基本行政區劃圖及多種類型的主題圖（如「臺灣南島民族遷移圖」、「新竹縣新豐鄉語言調查之空間資訊系統」等）。該系統利用了中研院在現地研究上的資源優勢，充分發揮了 GIS 的運算和存儲功能，其文獻整理及舊地圖處理，內容詳盡、搜羅宏富、解題說明簡明精當，在筆者所見有關臺灣研究的同類網站或出版物中，就蒐集的廣度以及地圖的圖像解析度而言，可以說無出其右者。如果 CCTS 系統能有同樣程度的豐富內容和精確性，對於眾多研究者而言，則可以達到實際利用的層面了。

天文から人文へ

山本一登（ただと）

人文科学研究所で仕事をするようになって一年が経過した。長かったのか短かったのかわからないが，この一年間を差障りのない範囲で振り返ってみたい。

せっかくなので振り返る前に筆者について簡単に自己紹介をしておく。

本プロジェクトに採用されたのだから，多少なりともこの業界と縁のある研究を行なってきたのであろうと読者の方がたは思われるかも知れない。しかし，私の専門は「天文学」である。天文といっても天文学史や古天文学とかではない，現代天文学の「天体力学」である（年々，天体力学を専門とする研究者は減ってきている）。これまで主に天体の自転・公転運動の力学進化に関係する研究をしてきた。修士のときは「中間軌道」という摂動理論を，博士のときは「対称多段法」という数値積分法の開発を行なってきた。

このように，まったく人文情報と縁のない業界の出身なのである。筆者のような経歴の人間が果たしてどのような成果を挙げることができるのか，それはプロジェクトが終了したときまでのお楽しみとしておきたい。

研究とは関係ないが，多少この業界に関係しそうなことといえば，書道が好きだったので文字の字形にはそれなりに興味があったくらいであろうか。なので，拓本データベースについて言えば，筆者にとって学術的な利用はかなり厳しいが，さまざまな字体を見るために，利用することはできるであろう。COE プロジェクトとしては，世界レベルの学術成果を挙げることが第一であるのは当然なことであり，我々が構築しようとしているナリッジベースというものの性質上，この業界に深く関わっている研究者にとっては不本意かもしれないが，筆者は研究目的以外の利用にも対応できるようなものを作り上げ，研究者以外の多くの方々に利用してもらうことも必要であると考えている。専門的な質問に対して専門的な答えしか得られないシステムに面白みを感じることはできない。初歩的な質問に対してもそれなりの答えと，関連する事項を提供し，リンクを辿りながら知識を深めていく，それがナリッジベースの本来のあるべき姿だろう。

当初，我々のナリッジベースは第一線の研究者を対象としていたが，大学院生などの若手研究者にも利用してもらえるように仕様が拡張されたことは私にとっても喜ばしいことである。

それでは，この一年間を振り返ってみよう。

昨年度当初，まだプロジェクト発足から半年しか経っておらず，ナリッジベースのシステム開発に関しては一年間で具体的にどのようなものを作るか模索している段階であった。しかも，コンピュータの扱いには比較的慣れていたとはいえ，ここで必要とされているスキルはまったく持ち合わ

せていない状態であった。これまでの研究活動で得た経験がほとんど活かせない現実に非常な不安と焦燥を抱いた。また，職場では私だけが違う業界の出身であることも不安要素ではあったが，こちらの不安はすぐに解消された。私にしては珍しく短期間で環境に馴染めたような気がする。

しばらくの間はテキスト処理に関する基礎をいろいろ勉強したりしながら，中国学については同僚にいろいろ教えてもらいながら学んできた。

テキスト処理に関してはこの業界で比較的定番として利用されているUTF-8という文字コードに柔軟に対応しているスクリプト言語，Perlを重点的に覚えることにした。

しかしながら，サンプルを見ながら実際にプログラミングをしての実験の繰り返しは退屈なものであり，UTF-8の扱い方もすぐには分らず，モチベーションを維持するのが厳しい状況であった。そんな折りに，唐代文献マークアップグループに加わることになり，少しずつではあるがPerlを実戦で使うことになった。実際の問題に適用するということで緊張感も生まれ，覚える速度も向上した。最初は慣れてないせいでスクリプト作成には時間を要してしまったが，このおかげでモチベーションを維持しながらPerlを覚えていけるようになった。Perl歴一年足らずなのでまだまだ未熟ではあるが，初期に作ったスクリプトはかなりお粗末なものだった。

そして，マークアップ作業がなかなかスムーズにいかない状況をできるだけ改善できるように，EmacsLispなども覚えていった（マークアップ作業にXEmacs［1］を使っていたことにはかなり驚いた）。このLispについては，いまだに馴染めず，自分の行ないたい処理をうまく書くことができずに苦戦している。今年度はLispもある程度自由に書けるようになるつもりでいる。

この一年間のほとんどをテキスト処理に費やしてしまい，ナリッジベースのシステム開発のほうをあまり進めることができなかったことは反省すべき点である。

しかし，ある程度スクリプトを自由に書けるようになり，一般公開向けではないものの，マークアップ作業向けのCGIを使った検索ツールを取りあえず作ることができたし，マークアップに関してはそれなりに貢献できたのではないかと思っている。これらのことを今年度の成果の一つとしてまとめることができればと考えている。

日常使わない漢字ばかり毎日眺めながら作業していると漢字の識別はかなりできるようになってきたが，漢文が読めないので文章の意味が解らないことが，時折悔しく思う。自宅のパソコンも天文仕様だったのだが，いつのまにやら人文仕様になってしまい，特殊な漢字も普通に画面に出力できるようになってしまった。最近のLinuxはすばらしく，特にGtk2ベースのアプリケーション［2］はフォントさえインストールされていればサロゲートペア文字［3］も問題なく出力してくれるので，私のようなLinuxユーザーにとってはありがたいことである。

プライベートな時間には天文の研究を続けたいと常々思っているのだが，家に帰っても仕事のことが気になってしまうのはなんとかしたいものである。筆者の天文の研究に関してもまだ未解決な問題が多く，今年はなんとか天文も両立できればと思っている。

さらには，COEの業績になるような古天文学の分野（特に天体力学的要素の強いテーマ）でも成果が出せないかと密かな野望も抱いている。

昨年度はナリッジベースのシステム開発は模索段階であったが，今年度は方針がかなり細かく決定し，具体的な目標が掲げられ，人物データベースの中核の構築に着手することになるなど，作業も本格化し，あわせて昨年度の反省をもとに前向きかつ現実的な改善も行われている。

今年度は新たな研究員も加わり，現場とプロジェクトマネージャーを交えた議論も活発に行なわれており，順調に成果が挙げられると期待している。

---

［1］参考 http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/projects/chise/xemacs/index.html

［2］ 参考 http://www.gtk.org/

［3］ U＋D800～U＋DBFFを上位，U＋DC00～U＋DFFFを下位サロゲートとし，2文字分を組み合わせて1文字を表す仕組みであり，これにより104万8576字を表現できる

Chinese Characters
and Culture

漢字文化

発行日　2005年 6 月30日
発行者　文部科学省21世紀 COE プログラム
「東アジアにおける人文情報学研究教育拠点―漢字文化の全き継承と発展のために―」
住　所　〒606-8265　京都市左京区北白川東小倉町47　京都大学人文科学研究所
電　話　075-753-6997　　FAX　075-753-6999
e-mail　coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site　http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/